569-14
1200900021271

岩波文庫

214

稲妻

作クルベトンリトス
譯隆豐宮小

岩波書店

岩波文庫
214

稲妻

作クルベトンリトス
譯隆豐宮小

岩波書店

稻

妻

569-14

I 種
W

1200900021271

舞臺

現代式住宅の表側、その地下室は花崗石で、外の部分は凡て黄色に塗り込めた煉瓦で出來てゐる。窓枠と裝飾部とには沙岩石が使つてある。地下室の中央に低い扉口、是は中庭へ行く入口ででもあれば同時に菓子店への入口ででもある。

家の正面は右手の曲り角で終る、其所に脊の高い薔薇や其他の花を植ゑた花壇が見える、この角の所に郵便函がある。

家の一階には、明け放たれた、大きな窓がある。窓の内の四つは、瀟洒に家具を配した、食堂の窓である。一階の上に尙、今一階上の住居が見える。其稍小さな四つの窓には眞紅な卷帷（ルーロー）が下ろされ、夫が内側から灯（あかり）で照らされてゐる。

家の前は街並樹の植わつた歩道である。前景には綠色のベンチ一脚と瓦斯燈一つとがある。

稻妻

人物

主人　非職官吏
主人の兄弟　領事
シュタルク　菓子店の主人
アグネス　その娘
ルイゼ　主人の身寄りの者
ゲルダ　主人の離別した妻
フィッシェル　ゲルダの今の所天、無言の人物

副人物　下男、牛乳配達の娘、郵便脚夫、氷屋、點燈夫。

シュタルクが椅子を持つて出て來て歩道の上に夫を置いて掛ける。

家の内に、食堂で、卓に就いてゐる主人が見える。主人の背後に綠色のマジョリカで出來た煖爐がある、煖爐には棚があつて、其所に枝の澤山出てゐる燭臺二つと花を挿した幾つかの甕との間に大きな寫眞が一枚立ててある。淺い色の著物を著た若い娘が主人に最後の皿を供してゐる。

主人の兄弟が往來の左手から來てステッキで窓のブリキを叩く。

兄弟　もう濟むかい？。

主人　今行くよ。

兄弟　（菓子屋に會釋をする）。シュタルクさん、今晩は、いつまでも暑い事ですねえ・・・。（ベンチに腰を下ろす。）

菓子屋　領事さん、今晩は、こりや土用の暑さでございますね、それに私（わたくし）どもぢや

終日煮ものに掛つてゐました・・・

兄弟　さうですか・・・今年は果物の出來は好いんですか?。

菓子屋　まあ、ですね。春が寒くつて、夏は又法外に暑かつた。私どもの樣に市中に居殘つてゐた者には、まつたく徹へましたよ!。

兄弟　私は田舍から昨日歸つて來ました、何ですね、夕方暗くなつて來ると、市中が戀しくなりますね・・・

菓子屋　私どもでは私も神さんも到頭何所へも出かけませんでした。そりや商賣の方は閑なんですがね、それでも油斷をしちやゐられないし冬の仕込みもしなくつちやならないし。畑苺と山苺とが一番に出ます、それから櫻坊が出ます、それから蝦夷苺が出ます、それからグースベリ、甜瓜、それからは秋の果物がみんなどつと出て來ます・・・

兄弟　ねえ、シュタルクさん、此家が賣に出てゐるつて、さうですか?。

菓子屋　いいえ、聞いた事もございませんよ!。

兄弟　此所には多勢住まつてゐるんでせう?。

菓子屋　裏まで一緒にすると、世帶が十はあるでせう。しかし誰もお互に知り合つてはゐない。つまり此所の家ではみんな恐ろしく話をし合はないんですね。なんだか、みんな此所に匿れてゐる樣な風にも見えます。私は此所に十年住んで居りますが、來た當座の二年程の間、裏隣に妙な人達が住んでゐた事がありました。晝間は終日ひつそりしてゐる、が。夜になるとざわざわする、それから車が來ては何か運び出すんです。二年目の末になつて、それが病院で、運び出してゐたのは死骸だつたといふ事が、やつと分りました。

兄弟　そりや堪らない!。

菓子屋　それが「靜な家」といはれてゐるのです!。

兄弟　さう、此家では誰も餘り口を利かないのでせう。

菓子屋　そのくせ此所では色んなドラマがあつたんです・・・

兄弟　そりやさうと、シュタルクさん、あの二階には、私の兄弟の上には、誰が住まつてゐるんです?。

菓子屋　ええ、あの紅い卷帷に灯のさしてゐる、あすこは此夏借りてゐた人が死にましてね。丸一月空いてゐたんですが、一週間許り前に越して來た人があります、私はまだ顏も見た事がないけれども・・・何といふのか、名前も知らないんです。なんだか、外へな

んぞ丸で出ない様ですよ。どうしてまた貴方は、そんな事をお聞きになるんです?。

兄弟　さう…どうしてつて事も!。あの四つの紅い卷帷(ルーロー)は、いかにもあの奥で血塗れのドラマが演じられてゐさうに見える…何となく私にはそんな氣がする。あすこに鐵の笞(むち)の様に棗椰子が立つてゐて卷帷(ルーロー)の上に影を落してゐる…人影でも少し見えると可いんだが…

菓子屋　影は隨分澤山見えますよ、もつとも夜が更けないといけないけれども!。

兄弟　女ですか、男ですか?。

菓子屋　兩方の様です…。さあ、是から又下りて行つて仕事に掛らなくつちや…

(扉口を這入る。)

(食堂にゐる主人は立ち上がつて葉卷に火を點ける。それから窓に凭り掛つて兄弟と話をする。)

主人　直ぐだよ——手袋の扣鈕を一つルイゼに縫ひつけて貰ふ丈なんだから。

兄弟　なにかい、市中(まち)へ下りて行く氣なのかい?。

主人　行つて見ても可いぢやないか…。お前は誰と話をしてゐた?。

兄弟　なあにあの菓子屋さんさ…

主人　さうか?。さうだ、ありや好い人だね、なにしろこの暑中つき合つてゐたのはあの人丈だつた…

兄弟　お前はどの晩もどの晩も丸つきり家(うち)に計りゐたのか?。一度も外に出た事はなかつたのか?。

主人　一度も!。いつまでも暗くならない季節の晩は、俺(おれ)には何だか怖い。田舍に行つてゐればかういふ晩は好いに違ひない、しかし市中(まち)にゐると妙に不自然な氣がしてね、氣味が悪い位だ!。瓦斯燈に始めて灯(ひ)を入れる季節になつて、やつと俺(おれ)は氣が落つく、晩の散歩も出來る様になる。さうすると身體が疲れて夜(よる)よく眠られる様になる…

ルイゼ　(手袋を持つて來る)。

主人　あ、難有う…窓は明けた儘にして置いて宜しい、此所いらは蚊がゐないんだから…。さ、行くよ!。

（暫すると花壇の傍を角を曲がつて主人が出て來る而して郵便函に手紙を一本入れる。それから前景へ出て來て、ベンチの上に兄弟の傍に腰を下ろす。）

兄弟　ね、どういふんだね、行かうと思へば行ける身體でゐながら、田舍へは行かずに市中に凝つとくつついてゐるのは？。

主人　どういふのかな！。俺は動けなくなつてゐる、色んな思ひ出が俺を此住居に縛りつけてゐる・・・唯此家の中にゐる時だけ俺は落ついてもゐられれば安心してもゐられる。さうだ、此家の中で！。自分の住居を外から見るのは面白いものだね。あの中に彷徨いてゐるのは丸で別な人間だといふ氣がする・・・。俺が彼所で十年も彷徨いてゐたなんて・・・

兄弟　もう十年になるかな？。

主人　さうだ、經つて了へば、月日の經つのは早い、然し經つてゐるうちは、こんな長いものはない・・・。あの時分は此家も新しかつた。俺は食堂に寄木の床板を張る所も見た。腰板や扉にペンキを塗る所も見た・・・。今でもまだ彼所に貼つてある壁紙は、彼女に選らせた壁紙だ・・・。さうだ、彼女に選らせたものだ！・・・。菓子屋と俺とは、此家で一番年をとつてゐる、さうしてあの男も矢つ張り色んな目に遭つて來てゐる・・・。あの男は

何をしても旨く行かない種類の人間でね。いつでも何かしら苦勞をしてゐる、俺は云はばあの男の生活を半分脊負つて、自分の重荷と一緒にあの男の分まで擔いでやつてゐる。

兄弟　あの男は酒でも飲むのか？。

主人　いいや！。その上にだらしのない人間でもない、それでゐて一寸も成功しない・・・。あの男と俺と、二人は此家の年代記を知つてゐる。みんな婚禮用の馬車に乘つて越して來て葬儀用の馬車に乘つて越して行く・・・それから彼所のあの角の郵便函だが、あれも隨分澤山色んな內證事を腹に入れて來てゐる・・・

兄弟　此夏の盛りに此家で誰か死んだといふぢやないか？。

主人　うむ、チフスだつた——銀行の役人だがね。それから其所は丸一月空いてゐた・・・初めは死骸が出て行つた、それから後家さんが子供達を連れて出て行つた、お仕舞には家具が出て行つた・・・

兄弟　それが二階の部屋なんだね？。

主人　あの上の、灯のさしてゐる。今は新奇の借手が住まつてゐる、俺はまだ知らないけれども。

兄弟　まだ顔も見た事はないのか？。

主人　俺は今迄に借手の事で頭を使つた事はない。獨りでに分つて來るものは、呑み込んでは置く、しかしそれを濫用したり中に首を突つ込んだりなぞはしない、年をとると氣を樂にしてゐられるのが一番難有いからな・・・・

兄弟　さうだ、年をとるとね！。俺はさう思ふ、年をとるといふ事は好い事だ、なにしろ目的地までもうそんなに遠くはなくなるから。

主人　さうだ、まつたく好い事だよ、俺は人生とも人間とも決算を濟ませて、もう旅をする支度にとり掛つてゐる。一人ぽつちといふ事は格別好い事でも何でもない、しかしどうしろのかうしろのと注文を持つて來るものが一人もゐないといふ事は、自由を獲たといふ事だ！。自分の勝手に行つたり來たり、考へたり行(し)たり、食つたり寢たり、自由なんだからな。

（此時二階で卷帷(ルーロー)の一つが捲き上げられる、しかしほんの少し許りである。女の著物が見える、そのあと直に卷帷(ルーロー)は下ろされる。）

兄弟　あの上で動き出して來た！。ね！。

主人　うむ、何だか妙に祕密がありさうな氣がする、しかし一番やり切れないのは夜(よる)だよ、音樂を、しかも拙(まず)い音樂をやり出す、かと思ふと骨牌を始める、らしいんだね、それから夜半過ぎに馬車が來て、客を連れて歸る・・・・。俺は是迄借手に苦情を云つた事はない、云ふと敵討をされるから、それに云つた所で誰も善くはならない・・・・。なんにも知らないのが一番可い！。

（一人の紳士が、帽子を被らず、スモーキングを著て、花壇の傍を出て來る、手紙を一束郵便函へ入れる、さうして消える。）

兄弟　恐ろしく郵便を出したものだ！。

主人　案内狀らしかつたよ！。

兄弟　しかし一體あの男は何者かね？。

主人　あれが二階に越して來た男に違ひない・・・・

兄弟　あれがかね？。何に見えるだらうな、お前はどう思ふ？。

主人　分らない！。音樂師、オペレットか何かの、寄席とも芝居ともつかない樣なものの興行師、骨牌師、色師、そんなものを少しづつ持つてゐる・・・・

兄弟　あの皮膚の色の白い所を見ると髪は黒くなくつちやならない、ところが褐色だつた、してみると染めたものか假髪をつけてゐるかだ。家にゐるのにスモーキングを著てゐるのは著物の餘りない證據になる。それに手紙を入れる時の手つきは、骨牌札を切つたり開けたり出したりする手つきだ・・・

（二階で非常に低くヴルッを奏する音がする。）

兄弟　不相變ヴルッだな、ことによると舞踏の教師かも知れない、しかし相も變らず同じヴルッだな。あれはなんとか云ふんだね？。

主人　はてな・・・あれは『黄金の雨』だよ・・・あれなら俺は空で知つてゐる・・・

兄弟　お前の所にあれがあるのか？。

主人　ある、あれとアルカザルと・・・

（ルイゼが家の内の食堂に現はれる、洗つたグラスを食器棚に置く。）

兄弟　お前は今でも矢つ張りルイゼが氣に入つてゐるのかね？。

主人　うん、非常に！。

兄弟　あの女はお嫁に行かないのだらうか？。

主人　そんな事知らないよ！。

兄弟　お婿さんはゐないかね？。

主人　どうしてお前はそんな事を訊くんだね？。

兄弟　お前が結婚する氣ででもゐるのかと思つて。

主人　俺が？。いや、澤山だよ！。俺が最後の結婚をした時には、俺はまだ年をとり過ぎてゐなかつた、なにしろ子供が直ぐ出來たんだから、今はしかし年をとり過ぎてゐる、その上今は俺は氣を樂にして年をとつて行きたい・・・。俺が今更家に女主人を呼んで來て、自分の生活も名譽も財産も滅茶苦茶にしたがつてゐる、とでもお前は思つてゐるのか？。

主人　生活と財産とは取り留めてゐるよ・・・

兄弟　お前はそれを知らないのか？。

兄人　と云ふのは？。

兄弟　あの女がお前の名譽を殺して了つたぢやないか、お前の所を出て行つて・・・

主人　ぢや俺は五年の間殺されてゐたのか、自分は知らずに？。

兄弟　お前はそれを知らなかつたのか？。

主人　知らなかつた、ぢや手短に、事實はどういふ風だつたか、話して聞かせよう：：。俺は五十になつて比較的若い女と結婚した、女は好きで來たので、威嚇した譯でもなければ無理强ひをした譯でもなかつた。その結婚の時俺は女にこんな約束をした、若し俺の年齡が若い相手に氣になる樣にでもなつたら、俺は一人で何所へでも出て行つて、女には元の自由を返してやると。そのうち丁度好い時分に子供が生れる、雙方ともうこのうへ子供を欲しいとも思はない——生れた娘は段段大きくなつて俺の手は要らなくなる、俺には自分が此家には用のない人間だと思はれて來たから、俺は出た、つまり俺はボートに乘つたんだ、俺達は島に住んでゐたんだから。それでこのお嘶はお仕舞だ！。俺は俺の約束を果して俺の名譽を救つた！。

兄弟　ところがあの女は自分の方が名譽を傷けられたと思つた、あの女は自分の方で出て行く氣だつたんだから、だからあの女はお前を殺したんだ、しかもお前の耳に這入りさうもない低い聲の惡る口で。

主人　自分も惡いのだとは云はなかつたのか？。

兄弟　いいや、それをいふ理由がない。

主人　ぢやあ、別に心配するがものもない！。

兄弟　あの女と子供とが其後どうなつたか、何かお前知つてゐるか？。

主人　俺はなんにも聞きたいとは思はない。なくしたものを惜む苦みを一切我慢し通したのだから、今では俺はあの話を葬られたものだと思つてゐる。しかも此家には色んな美しい思ひ出丈がくつついてゐる、だから俺は此所に今迄住んで來たのだ。——が、お前の貴重な報告に對しては感謝するよ：：

兄弟　どの報告に？。

主人　あの女が自分で自分を惡いと思ふ必要がないといふ事だ、若しあの女がさう思ふとすると、それこそ俺はたまらない：：

兄弟　どうもお前は非常に考へ違ひをしてゐる樣だ：：

主人　それならそれで可いからそつとして置いてくれ！。良心に疚しくない、大して疚しくないといふ事は、俺にはいつでも潛水服の樣な働きを持つてゐる、是があれば俺は窒息しずに深みへ下りて行く。（立上がる。）あの時俺はよく死ななかつたものだ！。—

ーが、今ぢやそれも過ぎ去つて了つた！。並樹路を散歩しようぢやないか？。

兄弟 しても可い、街燈に灯を入れ始める所が見られる譯だ。

主人 しかし今夜は月があるだらう、八月の月が！。

兄弟 出るどころか屹度滿月だらう・・・

主人 （窓の傍に寄つて家の内へ聲をかける）。ルイゼ、ステッキをとつて下さい！。輕い夏のを、何か持つてさへすりや可いのだから。

ルイゼ （籐のステッキを差し出す）。失禮でございますが！。

主人 ああ、難有う！。別に用がなかつたら、そこの灯を消しといて下さい・・・ちよつとは歸つて來ないだらう。どの位とは云へないけれども・・・

（主人と兄弟とは左手へ行く。）

（ルイゼ窓の所にゐる。菓子屋が又往來へ出て來る。）

菓子屋 今晩は。少し蒸し蒸ししますね・・・旦那方はお出掛になつたんですか？。

ルイゼ ええ、並樹路を下りていらつしやいました・・・。今晩が初めてなんですよ、

夏になつてからお出掛になるのは。

菓子屋 私どもの様に年をとると日暮れがたが好きになります。日暮れがたといふものは他人の缺點も自分の缺點もみんな隱して呉れます・・・。それはさうと、家の婆さんが盲になりさうでね。しかも當人は施術をするのは御免だと云ふのです。「見たいものなんぞ一つもない」と云ひます、それどころか、この上聾になりたい抔とよく云ひます。

ルイゼ 誰でも一度はさういふ氣持になるものなのでせうねえ！。

菓子屋 貴女なぞはその中で靜な結構な暮しをしていらつしやる！。裕福に、苦勞もなく。高聲の言葉だの荒い扉のあけたてだの私は是迄につひぞ聞いた事がない ——もつとも貴女がたの様なお若い方には少しお靜すぎるかも知れませんね？。

ルイゼ いいえちつとも、私は靜な事も上品な事も氣樂な事もきちんとしてゐる事も好きなのです。何もかも云つて了ふといふ様な事をしない、毎日毎日の出來事の内でも厭な方面の事は見て見ない振をする事を自分の義務だと思つてゐるといふ様な、さういふのが好きなのです・・・

菓子屋 お宅にはお客さんは丸でお見えになりませんね？。

ルイゼ　ええ、領事さんがお見えになるきりです、でもあんなに仲の好い御兄弟は私初めて拜見します。

菓子屋　一體何方がお兄さんなんでせう！。

ルイゼ　分りませんねえ……。一つお違ひになるのか二つお違ひになるのか、それとも雙子ででもいらつしやるのか、私には分らないのですよ、何方もお兄さんでいらつしやる様に、お互に丁寧にし合つておいでなんですもの。

アグネス　（出て來る、菓子屋の傍をこつそり通り抜けようとする）。

菓子屋　おい、何所へ行く？。

アグネス　ちよいと散歩して來るきりなのよ！。

菓子屋　そんなら可い、しかし直ぐ歸るんだよ！。

アグネス　（行く）。

菓子屋　どうですね、旦那は今でも奥さんの事やお孃さんの事を悲しんでいらつしやいますか？。

ルイゼ　悲しんでいらつしやりはしません、惜しがつておいででもありません、歸つて來れば可いなどと思つてはいらつしやらないんですから、しかし美しいもの計りが殘つてゐる思ひ出の中では、お二人と御一緒に住んでおいでです……

菓子屋　でもお孃さんの行末といふ事では屹度心配なさつておいでなのでせう……

ルイゼ　ええ、お母さんが再緣なさるといふ事を、屹度恐れていらつしやいます。さうなれば、どんな方がお父さんにおなりになるのか分りませんもの……

菓子屋　噂だと、奥さんは初めは一切補助は受けないと仰有つて置いて、五年たつたら、辯護士の手で何千圓とかの長い勘定書をお寄越しになつたつて……

ルイゼ　（話の腰を折る様に）。そんな事ちつとも存じませんよ

菓子屋　それにしてもあの方の思ひ出の中ではやつぱり奥さんが一番美しいものであるに違ひない……

下男　（一籠の葡萄酒を持つて）。一寸伺ひますが、フィッシェルさんはこちらでございますか？。

ルイゼ　フィッシェルさん？。聞いた事もありませんよ。

菓子屋　ことによるとあの二階に越して來た人がフィッシェルといふのかも知れない、あの角を曲がつて、二階で訊いて御覽。

下男　（花壇の方へ行く）。二階なんですね、どうも難有うございます。

ルイゼ　今夜は又眠られませんね、ああしてお酒を持つて行きますから。

菓子屋　ありや何者でせうね？。どうして顔を見せないのでせう？。

ルイゼ　大方裏の階子段を上り下りしてゐるのでせう、私もまだ顔を見た事がありません。もつとも音は聞えますけれども！。

菓子屋　私も扉を非道く締める音は聞いた事があります、人を撲る音も聞いた樣な氣もします・・・

ルイゼ　この暑さに窓を明けた事がないんだから、屹度南國の方なんでせうね・・・。あら、光ります！。一つ、二つ、三つ・・・。光る丈ですわね。神鳴の音は聞えない！。

聲　（地下室より）。ねえ貴方、下りて來て煮砂糖を見て下さいな！。

菓子屋　ああ、今行くよ！。――今砂糖漬をしてゐる所です・・・。さあ行くよ、行くよ・・・。（地下室へ這入つて行く。）

ルイゼ　（窓に凭つてゐる）。

兄弟　（右手から徐に歩行いて來る）。まだ歸つてゐないんですか？。

ルイゼ　いいえ、まだでございます。

兄弟　電話を掛けるから一足先へ行つてくれと云つたんだが・・・。なに、屹度もう直ぐ歸つて來るでせう・・・。おや、是はなんだらう？。（屈んで一枚の葉書を拾ひ上げる。）なんだ？。――『夜半過ぎよりボストン倶樂部閉會　フィッシェル』。――フィッシェルつて誰だらう、ルイゼさん、貴女知つてゐますか？。

ルイゼ　たつた今も葡萄酒を持つて人がフィッシェルさんつて尋ねて參りましてね、二階へ上がつて行きました。

兄弟　二階の、フィッシェル！。あの夜になると安全燐寸の様な灯のさす、あの紅い卷帷ですね？。どうも大變なお仲間なのかも知れませんよ！。

ルイゼ　ボストン倶樂部つて何なんでございます？。

兄弟　存外無邪氣なものかも知れません、尤も是はどうなのか私には分らないけれども……。しかしどうしてこの葉書が此所にあるのでせう？。——先刻來たとき落ことしたものに違ひない……それなら函に入れといてやらう……。フィッシェル？。何所かで聞いた事のある名前だが、何かと關係があるのだが、どうも思ひ出せない……。ルイゼさん、貴女に一つ伺ひたい事がある、私の兄弟は是迄一度もお話しした事はありませんか、あの——過去の事を？。

ルイゼ　私には一度も。

兄弟　ルイゼさん……貴女に伺ひたい事がある……

ルイゼ　失禮でございますが、晩の牛乳が參りましたから、一寸受取つてまゐります……

（ルイゼ去る。牛乳配達の娘右手から現はれ、花壇を通つて家の中に這入る。）

菓子屋　（又出て來る、白い鳥打帽を脱いで彈ませた息をする）。出たり這入つたり丸で穴熊みたいだな……あのまた下の竈の側の熱い事と云つたら……それに夕方になつても一寸も涼しくならない……

兄弟　屹度一雨來ますね、光つてゐるから……。市中は面白くもない、此所の山の手は靜かな丈でも可いですよ。五月蠅い馬車は決して通らないし、電車はまた無論の事通らないし——丸で田舍に行つてゐる様だ！。

菓子屋　そりや靜かには違ひありませんが、商賣には少し靜か過ぎます。是で私は仕事の方はまあ一人前なんですが、賣る方はどうも下手でしてね。昔から下手だつたんだが、まだ呼吸が呑み込めないんです。尤も何か外に譯があるかも知れない。ことによると心の持ち様がよくないのでせう。お客さんが私を詐欺師扱ひになさる様な事でもあると、

初めの内は氣が引けて尻込みしますが、仕舞には滅茶滅茶に怒つて了ふんだから。しかし今ぢやもう怒る事も出來なくなりました。角が摩り減らされたんですね、どんなものでも摩り減らされて了ひます。

兄弟　どうして何所かへ勤めないんです?。

菓子屋　私を雇ふものなんかゐやしません?。

兄弟　捜して見た譯ぢやないでせう?。

菓子屋　捜したつて仕様がないぢやございませんか?。

兄弟　ああそれぢや!。

（二階から長く尻を引く「ああ」といふ聲が聞える。）

菓子屋　ありやまあ一體、二階ぢや何をしてゐるのでせう?。命の遣り取りでもしてゐるのでせうか?。

兄弟　此家へ今度越して來たあの新しい得體の知れないものは、どうも私は氣に入らない。なんだか暴風雨の前の赤い雲の様に人の頭の上におつ被さつて來る!。ありや何者なんですかね?。何所から來たんです?。此所で何をしようといふのです?。

菓子屋　他人の事件に立ち入るのは非常に危險です——卷添を喰ふ丈なんだから…

兄弟　あなたはあの人達の事はなんにも知らないんですか?。

菓子屋　ええ、なんにも存じません…

兄弟　あ、また喚いてゐる、階段の上だな…

菓子屋　（徐に扉口を引つ込む）。私はこんな所に居合せたくありません…

ゲルダ　（主人の離別した妻、花壇へ出て來る、無帽、髪を振り亂し、興奮してゐる。）

兄弟　（女の方へ向つて行く）。

（二人は互に認識する。女はあとびさりする。）

兄弟　あ、あなただつたんですね?。

ゲルダ　ええ?。

兄弟　どうして此所の家へ越して入らしつたんです?。さうして、私の兄弟の落ついてゐる心持を、なぜそつとして置いておやりにならないんです?。

ゲルダ　（氣色ばんで）。訊いた名前が違つてゐたんです。私は越したものだと計り思つてゐました。私が悪いんぢやありません……

兄弟　ゲルダさん、私を怖はがらなくてもよろしい！。私を怖はがつちやいけない……。私に出來る事なら、手を貸してあげます。二階は何事です？。

ゲルダ　主人が私を打つたんです！。

兄弟　小さいのも一緒ですか？。

ゲルダ　ええ。

兄弟　ぢや繼父さんが出來た譯ですね？。

ゲルダ　ええ。

兄弟　まあ髪を直して氣を靜かになさい、後で話をしてみてあげますから……。しかし兄弟はそつとしといてやつて下さい……

ゲルダ　あの人は屹度私を憎んでゐるでせうね？。

兄弟　憎むどころですか！。この貴女の花壇に、貴女の植ゑた花を大事に育ててゐる、それが貴女には見えませんか？。貴女はまだ覺えてゐるでせう、この土は私の兄弟が春に

入れて自分で運んで來た土です！。あの貴女の碧い龍膽も貴女には覺えがある筈です、それから木犀草も、貴女の好きな薔薇も、あの、兄弟が自分で接木をしたマルメゾンとメルウェイユ・ド・リオンも。これでも、貴女と二人の間の娘との思ひ出をあの男がいかに大事にしてゐるか、すぐ分るぢやありませんか？。

ゲルダ　今何所にゐます？。

兄弟　今並樹路を歩行いてゐます、もう直ぐ夕刊を買つて歸つて來ます、若し左の方から來れば、中庭を通つて廣間に這入ります、そして坐つて新聞を讀みます。ぢつとしていらつしやい、さうすれば向うは氣がつかないから！。――しかし貴女は二階へ上つて行かなくつちやならないでせう。

ゲルダ　私厭です！。あんな男の所へ歸るのは厭です……

兄弟　何といふ人です？。何をしてゐる人です？。

ゲルダ　ええ――もとは歌唄ひだつたんです！。

兄弟　もとですか、さうして今は？。――遊び人ですか？。

ゲルダ　ええ！。

兄弟　博奕宿でもしてゐるんですか?。

ゲルダ　ええ!。

兄弟　それで子供は?。囮(おとり)ですね?。

ゲルダ　そんな言葉は使はないで下さい!。

兄弟　考へてもぞつとする!。

ゲルダ　貴女の仰有り様は少しひど過ぎます!。

兄弟　穢いものをその本當の名前で云つてはいけないと云ふ!。そのくせ正しい事は平氣で穢いものにされて了ふ!。なぜ貴女は私の兄弟の名譽を傷けたんです?。さうしてなぜ貴女は私を騙して貴女の共犯者にしようとしたんです?。私は人が好かつたから、貴女の云ふ事を一一本當にして、不正な貴女の肩を持つて兄弟に喰つて掛つた!。

ゲルダ　貴方は、あの方が年をとり過ぎてゐたのだといふ事を、忘れていらつしやいます。

兄弟　いや、あの當時は決して年をとり過ぎてゐなかつた、その證據あなた方の間には直ぐ子供が出來たんだから!。それに私の兄弟は、貴女に結婚を申込んだ時、子供が欲

しいかどうかと、貴女に訊いた筈です。その上、私の兄弟は、自分が義務を果したら、さうして自分の年が貴女に氣になる樣になつたら、貴女を元の自由な體(からだ)にしてあげると、お約束した筈です。

ゲルダ　あの方は私を置き去りにしました、是は私に對する侮辱です。

兄弟　貴女には侮辱ぢやない!。貴女の若さがその恥辱に對して貴女を保護したのです‥‥

ゲルダ　私をこそ出て行かせて下さるべきだつたんです!。

兄弟　どうして?。どうして貴女はそれほどあの男の名譽が傷けたかつたんです?。

ゲルダ　どうせ何方(どちら)か一人恥辱を脊負はなくてはならないんですもの!。

兄弟　貴女の考へ方は實に妙ですね!‥‥。兎に角貴女はあの男を殺した而(さう)して私を騙して私にもそれをさせようとした。一體どうすれば私達はあの男の名譽を恢復する事が出來ます?。

ゲルダ　あの人の名譽が恢復すれば、私の名譽は犧牲にされます!。

兄弟　憎みといふ事丈で動いて行く貴女の考へ方には、私はどうも同感が出來ない!。

しかしその名譽恢復の話は一先づやめにして、子供を救ひ出す事丈を考へる事にしませう。それにはどうすれば可いのです?。

ゲルダ　あれは私の子です、法律がそれを認めてゐます、さうして今の所天があの子の父です・・・

兄弟　貴女の仰有り樣は少しひど過ぎます!。それに貴女は大分下等になつてお了ひになつた・・・。しつ、やつて來ましたよ!。

（主人が手に新聞を持つて左手からやつて來る、考へ込んで中庭へ通ずる扉口を這入つて行く、その間兄弟とゲルダとは花壇の側の角に匿れて身動もしずに立つてゐる。）

（兄弟とゲルダとが前景に現はれる。間もなく主人が部屋の中に坐つて新聞を讀むのが見える。）

ゲルダ　ああ、の人だ!。

兄弟　こつちへ來て貴女のホームを御覽なさい!。私の兄弟は、貴女が貴女の好み通りに飾つた部屋の中を、そつくりその儘にしてゐます!。――心配しなくてもよろしい、此所は暗いから向うからは見えない。灯で眼がちらちらするんだから、大丈夫です!。

ゲルダ　本當にあの人は嘘つきだ・・・

兄弟　何が?。

ゲルダ　ちつとも年をとつてゐないぢやありませんか!。あの人は私が厭になつたんです、それ丈の事なんです!。御覽なさい、なんてカラをしてゐるんでせう、それに流行たてのネクタイなんぞをして!。屹度女があるのよ、極つてるわ!。

兄弟　その女の寫眞は、あの煖爐の上の燭臺の間にあります!。

ゲルダ　あれは私と娘です!。あの人は今でも私を愛してゐるのでせうか?。

兄弟　貴女の思ひ出を!。

ゲルダ　訝しいのね!。

（主人讀み止めて窓の外を凝視する。）

ゲルダ　わたし達を見てゐるわ!。

兄弟　ぢつとしていらつしやい!。

ゲルダ　眞面に私の眼を見てゐる!。

兄弟　ぢつとしていらつしやい!。貴女は見えやしません!。

ゲルダ　なんだか死骸の様な・・・

兄弟　事實殺されてたんだから！。

ゲルダ　どうしてそんな風に仰有るんです？。

（この時劇しく稲光がしてゲルダと兄弟との姿を照らす。）

主人　（部屋の中で愕然として立ち上がる）。

ゲルダ　（花壇の側の角に匿れる）。

主人　カール・フリードリッヒ！。（窓に立ち寄る。）お前一人きりなのか？。――俺はまた・・・本當にお前一人きりなのか？。

兄弟　御覽の通りだ！。

主人　いやに鬱陶しい、花の香で頭痛がして來た・・・。しかし兎も角この新聞を讀んで了はう。（元の座に復る。）

兄弟　（ゲルダの側へ行く）。そこで貴女の方の事だが！。どうですか、一緒に上へ行つて上げませうか？。

ゲルダ　さうね！。でも一騒動始まるかも知れませんよ！。

兄弟　しかしどんな事があつても子供は救ひ出さなくつちやならない！。私も男だ！。

ゲルダ　それぢや子供の爲にですね！。來て下さい！。

（二人は行く。）

主人　（部屋の中から）。カール・フリードリッヒ！。來て象棋をしないか！。カール・フリードリッヒ！。

食堂。

（背景に陶製煖爐。その左手に調饌室に通ずる扉が開かれてゐる。右手に廊下へ出る扉が開かれてゐる。左手に電話機を備へた卓（ビュフェ）がある、右手に洋琴と置時計とがある。左右の壁に各扉がある。）

ルイゼ　（這入つて來る）。

主人　私（わたし）の兄弟は何所へ行つたんだらう？。

ルイゼ　（不安さうに）。たつた今窓の所にいらしつたのですから、そんな遠くへお出でになつたのぢやございますまい。

主人　この上ぢや恐ろしくどたばたやつてゐるねえ！。丸で頭の上で大勢足踏みをしてゐる樣だ！。あ、簞笥の抽斗を開けてゐる、旅行でもするのか、ことによると逃げ出すのかも知れない……。ルイゼさん、せめて貴女でも象棋が出來ると可いんだが！。

ルイゼ　ええ、ほんの少しなら存じて居りますけれども……

主人　なあに駒の行き道さへ分つてゐれば、あとは獨りでに出來て來る……。まあ其所へお掛け！。

（主人象棋盤に駒を並べる。）

主人　二階であんまりどたばたやるものだから、懸燈（ランプ）が震へてゐる……おまけに下では菓子屋が火を焚いてゐる……私は近いうち此所を越さうかと思つてゐる。

ルイゼ　疾うからさうなさればよろしいにと、私（わたくし）は思つて居りました。

主人　疾うから？。

ルイゼ　古い思ひ出の中（なか）にあんまり長い間住んでゐるのは、いい事ではございません。

主人　どうしてよくない？。時が過ぎ去れば、どんな思ひ出でもみんな美しくなるものぢやないか……。

ルイゼ　でも貴方はまだこの先き二十年は生きていらつしやれます、思ひ出の中に樂しく住んで行くには二十年は長すぎます、その内には色も褪めます、どうかするといつのまにか色が變つてゐる事もあります。

主人　お前、色んな事を知つてゐるな！。――さあ始めよう、百姓を動かして御覽！。いやその王妃の前の百姓ぢやない、それを動かすと二た手で負ける。

ルイゼ　では私馬を動かしますわ！。

主人　そいつもやつぱり危險だ！。

ルイゼ　でも私とにかく馬を動かす事にいたしますわ！。

主人　よろしい！。それでは私は飛脚で行く……

菓子屋　（茶の盆を持つて廊下に現はれる）。

ルイゼ　あ、シュタルクさんがお茶とパンとを持つて來て下さいました。丸で鼠かなぞの樣に跫音を立てずにお歩行きなさいますこと！。（立ち上がつて廊下へ出る、菓子屋から盆を受とつて、それを調饌室へ運ぶ。）

主人　シュタルクさん、お神さんはどうですか？。

菓子屋　難有うございます、やつぱりいつもの眼なので……

主人　貴方は私の兄弟を見かけはしなかつたでせうね？。

菓子屋　何所か其所いらを散歩していらつしやるんぢやございませんか。

主人　連れでも出來たのか知らん？。

菓子屋　いえ、そんな事はございますまい。

主人　シュタルクさん、貴方がこの部屋を見るのは、隨分久し振りですねえ！。

菓子屋　ええ、丁度十年振りでございます……

主人　結婚式用のトルテを持つて來て呉れた時ですね……。この部屋はあの時分と何所か變つてゐますか？。

菓子屋　そつくりその儘です……。そりやあの棕櫚の木は勿論その後大きくなつてはゐますが……。ええ、そつくりその儘でございますよ……

主人　今度貴方がお葬ひのトルテを持つて來てくれる迄は、屹度この儘でゐる事でせう！。どんなものでも或年齡に達すると最早その先は變化しない、ぴたりと一ところに止まつて了ふ……そのくせ崖の上の橇の樣にどんどん滑つては行くのです……

菓子屋　ええ、まつたくその通りでございます！。

主人　さうなると氣は樂になる……。戀もなければ友達もない、まあ一人ぽつちの所に話し相手といふ樣なものがある丈のことになる。すると世間の人間が只の人間になる、

此方に感動を強ひたり同情を要求したりしなくなる！。するとその人は丁度古い齒が痛みも未練も惹き起さずに脱け落ちる様に社會から脱け落ちる。例へばあのルイゼだ、ああいふ若い綺麗な娘なぞ眺めてゐると寔に好い心持になる、しかし藝術品を眺める様な氣でゐるから、それを自分のものにしようとは思はない。だから二人の間の關係を打ち毀すものの出て來やうがない！。私の兄弟と私とでも、丁度二人の老紳士の様につき合つてゐる、決して立ち入り過ぎたり狎れ過ぎたりはしない。人間に對して中性の態度をとつてゐれば、向うと此方との間には或距離が保てる、或距離を置くと萬事がずつと無事に行く。一口に云ふと、私は自分の年齡と年齡から來る寂な氣樂さとに滿足してゐる。――（呼ぶ。）ルイゼ！。

ルイゼ　（左手の扉口に現はれる、いつもの様に優しく）。洗濯物を持つて來ましたので、一寸數へて見ませんと……

主人　シュタルクさん、まあ掛けて話して行つてはどうですか？。貴方は象棋をさんでしたねえ？。

菓子屋　今一寸竈の傍を離れてゐる譯にまゐりませんので、それに十一時には奥の竈を焚きつける事にもなつて居ますから……。御親切は難有うございますけれども……

主人　もし私の兄弟を見掛けたら、どうか來て相手をして呉れる様に云つて下さい……

菓子屋　畏りました……（去る。）

主人　（獨で、一寸の間象棋の駒を動かす、それから立ち上がつて部屋の中を歩行き廻る）。老境の平和かな！。（ピアノの前に掛けて二所三所彈いて見る、立ち上がつて又部屋の中を歩行き廻る。）ルイゼ！。洗濯物なぞ延ばす譯には行かないかな？。

ルイゼ　（扉口で）。さういふ譯には、お神さんが待つて居りますから、内では亦御亭主と子供とがそのお神さんを待つて居りますし……

主人　ふむ、それもさうだね！。（卓の前に掛けて指で拍子をとる、新聞を讀んで見ようとする、しかし退屈する、燐寸をすつてはそれを吹き消す、時計を見る。）

（廊下に跫音がする。）

主人　おい、カールなのかい？。

郵便脚夫　（現はれる）。郵便屋でございます！。御免下さい、這入つて參りまして、

扉が明いてゐたものですから！。

主人　手紙がありますか？。

郵便脚夫　いえ葉書一つきりでございます！。（それを渡して去る。）

主人　（葉書を讀む）。又フィッシェルだ！。ボストン倶樂部だ！。二階のあの男だた！。あの手の白い、スモーキングを著た！。あれが俺に案内を寄越す！。なんて圖圖しい！。こりや越さなくつちや遣り切れない！。——フィッシェル！。（葉書を二つに引き裂く。）

（廊下に跫音がする。）

主人　おい、カールなのかい？。

氷屋　氷屋でございます！。

主人　それは難有い、かういふ暑い晩に氷が來るのは！。だが冷藏庫の中の瓶に氣をつけて下さい！。それから、氷を竪に置いといて下さい、溶けるときぽたぽた雫の垂れる音が聞えていいから——それが私の水時計になる、それが時を刻んで吳れる、長い時を：：。ねえ君、君の所は何所から氷をとるんですか？。：：あ、行つて了つた：：。みんな自分の家へ歸つて行く、自分の聲が聞きたいのだ、話相手が欲しいのだ：：

（間。）

主人　おい、カールなのかい？。

（その時二階でショパンの Fantaisie Impromptu 作品六十六を洋琴で彈く。しかしその第一部丈である。）

主人　（聽耳を立てる、はつと眼が覺めた樣になる、天井を見上げる）。誰が彈いてゐるのか？。俺のアムプロムテュを？。（手を眼の上に當てて聽耳を立てる。）

兄弟　（廊下から這入つて來る）。

主人　おい、カール　のかい？。

（音樂が中斷される。）

兄弟　俺だよ！。

主人　こんなに長い間何所へ行つてゐたのだ？。

兄弟　一寸用があつたものだから。お前はずつと一人でゐたのか？。

主人　さうだ！。さ、象棋をささう！。

兄弟 それより話をしようよ！。お前だつて少しは自分の聲を聞くが可い！。

主人 そりやその通りだ、しかし話をすると兎角過去の事に落ちて行くのでね・・・

兄弟 さうすれば現在の事が忘れられるよ。

主人 いやこの世の中には現在なんていふものはない。今眼前に起つてゐる事は、みんな意味のない空なものだ。前か後ろか——前が一番好い、なにしろ前には希望があるから！。

兄弟 （卓に凭つて）。希望つて何を希望するのか？。

主人 變化を希望するのさ！。

兄弟 よろしい！。といふ事は、お前がその老境の平和なるものに厭きて來たといふ事なんだな？。

主人 さうかも知れない！。

兄弟 それに違ひない！。ところで、今お前が一人ぽつちと過去と何方が好いと訊かれるとしたら・・・

主人 幽靈は御免だ！。

兄弟 ぢやお前の思ひ出は？。

主人 あれは其所いらを彷徨しはしない。あれは或事實を俺が想像で改作したものだ。しかし死んだ者が出て來て其所いらを彷徨するとすれば、それは幽靈だらうぢやないか！。

兄弟 それぢやその思ひ出の中で——二人の内何方がお前の眼には懐しい、女房か子供か？。

主人 何方も！。俺には二人は離す事は出來ない、だから俺は子供丈を手許に置からなどといふ事を考へなかつた。

兄弟 しかしそれは正しい處置だつたらうか？。お前は自分の子が繼父の手にかかるといふ事を考へては見なかつたのか？。

主人 當時は其所迄は考へなかつた、しかし後になつて——幾度も——その事を——考へ返して見た・・・

兄弟 繼父が出來て、お前の娘を虐待する、どうかすると屈辱を與へる！。

主人 しつ！。

兄弟 なんだ？。

主人　「小さな足音」が聞える様に思はれたから、あの子が俺の部屋に來る時にいつも廊下で聞えたあの小さなちよこちよこした足音が……。子供がやつぱり一番好いらしい！。何が怖いといふものもない、人生の虚僞を夢にも知らない、祕密を一つも持つてゐない、惡びれる事の少しもない小さなものを見てゐるのが。俺はあの子が人間の意地惡な事を初めて知つた時の事を未だに覺えてゐる。下の花壇に可愛い子供が立つてゐた、あの子はそれを見つけて兩手を廣げて駈け出してその知らない子にキッスしようとした。その可愛い子供はその好意の返禮に、うちの子の頰つぺたに喰ひついて後で舌をぺろりと出して見せた。その時のうちのアンナ・シャロッテの顏と云つたらなかつた。あの子は丸で化石した様になつてゐた、創が痛いからではない、自分の目の前に口をあいてゐる恐ろしい淵を覗いて愕いたからだ、人間の心といふ恐ろしい淵を。俺にもかういふ經驗がある、非常に美しい眼の奥に不意に丁度獰惡な野獸の眼の光の様な丸で見馴れない異様な光が見えた、俺はその時心の底からぞつとした、假面の様なその女の顏の後ろに誰かゐるのではないかと思つて覺えず目搜しした位だ。――しかしなぜまたこんな話をし出したものだらう？。暑さと夕立のせゐかなそれとも何か外のものせゐかな。

兄弟　一人ぽつちでゐると氣が重くなる、話相手を探すとよかつた。夏中市中に籠つてゐたのがお前の身體に徹へたのかも知れない！。

主人　なに是はこの一二週間の事だ。二階に病人が出來て死んだ、それが自分が病氣になつて自分が死にでもした様に俺に徹へた。それにあの菓子屋の苦勞までが俺の苦勞になつて了つた、あの男の暮し向きの事やあの男の神さんの眼病の事やあの男の將來の事や俺は氣になつてならない……。その上近頃毎晩の様にあの可愛いアンナ・シャロッテの夢を見る。それがいつでも危險な、何とも分らない何とも名づけ様のない危險な地位に置かれてゐるのだ。それで俺は寢入る前、耳が馬鹿に慧くなると、俺にはあの子の小さな足音が聞える、一度なぞあの子の聲を聞いた事もある……。

兄弟　一體あの子は何所にゐるのだ？。

主人　さあ――何所だらう？。

兄弟　もしあの子に往來で遭ふ様な事でもあつたら……

主人　さうしたら、屹度俺は氣が狂ふか、それでなければその場に倒れるに違ひない……。といふのは、俺は、妹の大きくなる盛の時分に、隨分長い間外國に行つてゐた事が

ある…。何年も經つて歸つて來ると、棧橋に若い娘が立つてゐて、いきなり俺に飛びついた。その時二つの眼が、俺の方で相手を誰だと見わけがつかずにゐる事を非道く氣遣つて恐れて妙に改まつた表情を浮べながら、俺の眼の中に無理に這入つて來ようとするのを見て、俺はぎよつとした。妹は、俺が妹だと氣がつく迄は、「私よ！」を幾度も幾度も繰返した！。——俺が今娘に會つたら丁度その時の通りだらうと思ふ。あの年頃で五年も經てば、もう見覺えがなくなつてゐるに違ひない！。考へて見て呉れ、自分の子供の見分けがつかない！。自分の子供に違ひはない、しかもそれが見た事もない顏をしてゐる！。そんな事は到底俺には堪へられない！。いや、そんな目に遭ふよりは俺は此家の祭壇に祀つてあるあの四歳になる小さい娘を自分の傍に置いて置く。あれ以外のものは俺には欲しくない。

（間。）

主人　あれはルイゼかな、洗濯物の簞笥を片づけてゐるのは？。洗ひたての下著の匂ひがする、あの匂ひを嗅ぐと…簞笥の傍にゐる世話女房を思ひ出す、手入れをしたり仕立直しをしたりする親切な家の神を。火熨斗を使つて平らでないものを平らにしたり皺の

出來たものを伸ばしたりする世話女房を…さうだ、この皺といふのが…

（間。）

主人　一寸——俺は——書齋へ行つて、手紙を書いて來る。すぐ來るんだから、待つてゐてくれ！。（左手へ去る。）

兄弟　（咳拂ひをする）。

ゲルダ　（廊下口に現はれる）。お一人つきり…。（置時計が鳴る。）ああこの音だ…この音が十年の間私の耳の中で鳴つてゐたんだ！。いつも狂ひ通しに狂つてゐて、それでも五年といふ長い間夜も晝も時を刻んで行つたこの時計。（あたりを見廻す。）私の洋琴がある…私の棕櫚の木がある…食卓がある、盾かなぞの樣にぴかぴかしてゐて、あの人大事にして來たのね！。私のビュフェがある！。騎士とエヴ、エヴは林檎を籠に入れて持つてゐる…。右の抽斗のずつと奥には寒暖計が入れてあつた。（間。）今でもあるか知ら…。（ビュフェの傍に行つて抽斗を拔く。）ああ此所にある！。

兄弟　それに何か意味があるのですか?。

ゲルダ　ええ、是がお仕舞にはシムボルになつて了つたのです、變り易いといふ事の……。この部屋の飾つけをする時に、この寒暖計を掛けるのを忘れました――窓の外に掛ける事になつてゐたのですけれども――私が屹度掛けさせて置きますと受け合つて置きながら――つい忘れて了ひました。今度はあの人が自分で掛けると受け合つて置いて、またそれを忘れて了ひました。それで私もあの人もこの寒暖計の事で互に氣拙い思ひをし合ひました、仕舞には眼の前にある事が厭になつて、私はそれをこの抽斗の中に隱して了ひました……。私は寒暖計を憎み出しました、あの人も同じ様に憎み出しました。――是はどういふ事になるとお思ひになります?。――二人が二人、自分達の關係が持續するといふ事を些とも信じなくなつたといふ事なのです、お互に假面を脱いでお互に反感を見せ合つたのですから。私達は夫婦になつた當座から丸で中腰で生活してゐたのです――いつでも飛び出せる用意をして。――それがこの寒暖計なのです――それが未だに此所にかうして置いてあるのです!。上がつたり下がつたり、お天氣次第でいつでも變ります。

（ゲルダ寒暖計を投り出し、象棋盤の傍に行く。）

ゲルダ　私の象棋がある!。子供が生れる事になつてから、生れる迄の退屈凌ぎに、是をあの人が買つて來た!。今は誰としてゐるんです?。

兄弟　私と!。

ゲルダ　あの人は何所にゐるんです?。

兄弟　書齋で手紙を書いてゐます!。

ゲルダ　書齋は何所です?。

兄弟　（左手を指す）。あすこです!。

ゲルダ　（胴震ひをする）。さうして此所にあの人は五年間住まつて來たんですか?。

兄弟　十年間です、五年は獨で!。

ゲルダ　一人ぼつちでゐるのが好きなんでせうか?。

兄弟　そろそろ厭きて來た樣子です。

ゲルダ　私を見たら出て行けつて云ふでせうか?。

兄弟　試して御覽なさい!。心配な事は些しもない、どんな場合でもあの男は失禮な事はしない男だから。

ゲルダ　私是迄まだ人の家に押し掛けて厄介になつた事なんかありません・・・

兄弟　といふ事は、子供の事でも訊かれると困るからといふ事なんでせう。

ゲルダ　だつて子供を目つけるには、あの人こそ骨を折つて呉れべきでせう・・・

兄弟　一體フィッシェルは何所へ行つたのか見當はつかないんですか、それにあの男は遁げ出してどうしようと云ふのでせう?。

ゲルダ　一つはこの不愉快な隣近所から抜け出したいからでせうし、一つは私に後を追はせようといふのでせう。あの子を人質にとつて置いて、行く行くはバレーに出る樣に仕込む氣なんです、あの子は踊が心から好きだし質もいいのだから。

兄弟　バレーに?。そんな事を決してお父さんに聞かせるんぢやありません、踊舞臺は目の敵の樣にしてゐる男なんだから!。

ゲルダ　(象棋盤の傍に腰を下ろして茫然駒を並べて見る)。踊舞臺!。私だつて踊舞臺を踏んだ事があります!。

兄弟　あなたが?。

ゲルダ　連れが連れですからね!。

兄弟　そりやひどい!。

ゲルダ　どうして?。私は元元さういふ生活が好きだつたんです、私が縛られて此家にぢつとしてゐて、段段元氣がなくなつたのは、牢番が悪かつた爲ぢやなかつた、牢屋といふものが悪かつた爲です!。

兄弟　ところで今はさういふ生活に厭きが來たといふのですか?。

ゲルダ　今では私には落ついた寂しい生活が大事です・・・取り分け私の子供が!。

兄弟　しつ、來ましたよ!。

ゲルダ　(逃げ出さうとでもする樣に立ち上がる、しかし又倒れる樣に椅子に腰を下ろす)。ああ!。

兄弟　ぢやあなたを一人此所に置いて行きますよ!。——どう云はうか抔と考へてはいけない。云ふ事は放つて置けば獨りでに出て來る、象棋の次の手の樣に。

ゲルダ　私が一番怖いのは私を見るあの人の一番初めの目つきです、私が善く變つたか悪く變つたか・・・私が年をとつたか不器量になつたか・・・私にはその目つきで直ぐ分るから・・・

兄弟　（右手へ行く）。あなたが年をとつたと思つたら、あの男は平氣であなたの傍へ寄つて行くでせう。昔の通りに若いと思つたら、あの男は諦めて了つて、あなたには想像もつかない程控へ目に振舞ふでせう！。――さあ！。

主人　（徐に調饌室に通ずる左手の開け放した扉口を通る、手に一本の手紙を持つてゐる。見えなくなる、しかし又直ぐ廊下に現はれて外へ出て行く）。

兄弟　郵便を入れに行つたんです！。

ゲルダ　私は迚も堪へられない！。あんなな別れ様をして置いて今更又手を貸して下さいなんて！。私は逃げます！。あんまり厚かましくつて！。

兄弟　いらつしやい！。御存知の通り、あの男の親切は底が知れない程も深い！。あの男は自分の子供の爲に屹度あなたに手を貸します！。

ゲルダ　いけません、いけません！。

兄弟　それにあなたに手の貸せるのはあの男丈ですよ！。

主人　（廊下から眞直に部屋の中へ這入つて來る、近眼なのでルイゼだと思つてゲルダに輕く會釋をする、ビュフェの上の電話機の傍へ行つて鈴を鳴らす、しかもゲルダの前を通りがかりに一寸口を利く）。もう濟んだのかい？。駒を並べてお置きなさい、ルイゼ、初めから遣り直すから・・・

ゲルダ　（化石した樣になつてゐる、なんの事だか呑み込めない）。

主人　（ゲルダに脊中を向けて、電話をかける）。もしもし！。――今晩は、お母さんですか！。――ええ、難有う、達者でゐます！。ルイゼは今象棋盤の前に坐つてゐます、ですがぐつたりしてゐる樣です、用が澤山あるものですから。――ええ、あれはもう濟みました、萬事片がつきました！。みんな下らない事ですよ。――暑いかですつて？。此方ぢや今神鳴が鳴りましてね、丁度私達の頭の上位な所で、でも何所へも落ちはしませんでした！。空騷ぎをさせられた樣なものです！。――え、なんですつて？。フィッシェル？。え、でもあの連中は越して行くらしいのです！。――どうしてです？。私は別になんにも知りませんよ！。――さうですか！。さうですか？。――ええ、汽船は六時十五分に出ます、さうして著くのは、一寸待つて下さい、八時二十五分です！。――面白うございました

か?。——(少し笑ふ。) ええ、あの男は少し滑稽ですよ、やり出すと、マリアは何て云つてゐました?。——夏中どうだつたですつて?。ルイゼと私と二人でお互に話相手になつて暮しましたよ。ルイゼは機嫌にむらがなくていつでもにこにこしてゐます。——まつたく、あの子は好い子です、まつたく!。——いいえ、難有う、そんな事はありませんよ!。

ゲルダ (事情が呑み込める、驚愕して立ち上がる)。

主人 私の眼ですか?。ええ、段段近くなつて行きます、でも菓子屋の神さんの様に、私もなんにも見たいものはないのです!。少しは聾になりたい位にも思つてゐます!。聾になつて盲になつて!。——二階の人達は昨夜恐ろしくどたばたしましたよ…なんでも博奕宿の様なんです…。おや、誰か切つて了つた、話を盗まうと思つて!。(又鈴を鳴らす。)

ルイゼ (廊下の扉口に現はれる、主人には彼女が見えない。ゲルダは驚嘆と憎悪の眼を以て彼女を眺める、ルイゼは右手の扉口から後びさりをして行く。)

主人 (電話にて)。まだいらつしやいますか?。人の話を聽かうと思つて切つて了

ふなんて非道い奴ですね!。では明日の六時十五分に!。——難有う、あなたもどうぞ!。——お易い御用です!。さやうなら、お母さん!。——(鈴を鳴らして切る。)

(ルイゼ消えて了ふ。ゲルダは部屋の眞ん中に立つてゐる。)

主人 (振返つて、ゲルダを見る、段段顏が分つて來る、心臟部を押へる)。呀、お前だつたのか!。今ゐたのはルイゼぢやなかつたのか?。

ゲルダ (默つてゐる)。

主人 (ぐつたりして)。どうして——お前は——此所へ——來た?。

ゲルダ 許して下さい、私は旅の途中、この町を通りかかつて、急に昔の家が見たくて堪らなかつたものだから…窓がみんな明いてゐました…

(間。)

主人 どうだね、昔の通りだと思ふかね?。

ゲルダ そつくりその儘ですわ、でも少し違つた所が——何だか違つたものが這入つて來てゐるわ…

主人 (不興げに)。お前は滿足してゐるのかい——お前の今の生活に?。

ゲルダ　ええ――ええ！。自分の思ひ通りになつたんですもの。

主人　子供は？。

ゲルダ　ええ、大きくなつてゐます、元氣にしてゐます、何不自由なく暮してゐます。

主人　そんならもう訊く事はない。

（間。）

主人　お前何か私に用でもあるのか？。してあげられる事があるなら遠慮なく云つて御覽？。

ゲルダ　難有うございますが、別に……是と云つてお願ひする事もありません、貴方も何不自由なく暮してお出でになる所を拜見したのですから！。

（間。）

ゲルダ　貴方はアンナ・シャロッテを御覽になりたくはありませんか？。

（間。）

主人　見たいとも思はない、何不自由なく暮してゐるといふ事を聞いたんだから。――なんでも繰返すといふ事は苦しいものだ――丁度、教師の方ではさうは思はなくても、

實際はちやんと獨で出來る小學校の日課を、無理にもう一度教はらされる樣なものでね……。俺はさういふ事の凡てから隨分遠のいた所に來てゐる――丸で違つた國へ來てゐる――だから俺は過去と現在とを結びつける事が出來ない――お前に對して失禮をするのは心苦しいが、掛けて話してお出でといふ事が、俺には云へない……。お前は人の妻君だ――それにお前は、俺が別れたのと同じ人間ではない……

ゲルダ　私はそんなに――變つたでせうか？。

主人　何から何まで變つてゐる！。聲も、眼つきも、樣子も……

ゲルダ　年が寄りましたか？。

主人　それは分らない！。――何でも、三年經てば人間の身體には元の原子はなくなる――五年の内には何もかもすつかり新しくなるさうだ……。だから今私の前に立つてゐる人は、この部屋にゐて苦しんだ女とは丸で別な人だ――私の口からはお前といふ言葉が中中出て來ない、それ程あなたはあかの他人の樣な氣がする！。自分の娘に會つても丁度同じ樣な氣がするに違ひない！。

ゲルダ　そんなに仰有つては困ります！。怒つて下さつた方がどんなに好いか知れな

い！。

主人　どうして怒る譯がある？。

ゲルダ　私があなたに仕向けた色んな惡い事が澤山あります。

主人　さうかな？。そんな事俺は少しも知らない。

ゲルダ　あなたは告訴狀をお讀みにならなかつたんですか？。

主人　讀まない、俺はあれを辯護士に渡して了つた。

（掛ける。）

ゲルダ　では判決文は？。

主人　それも丸で讀まなかつた。この先き二度と結婚する氣はないんだから、そんな書類を讀む必要がなかつた！。

（間。）

ゲルダ　（掛ける）。

主人　全體判決文にはどんな事がかいてあつた？。俺が年をとり過ぎてゐるとでもかいてあつたのか？。

ゲルダ　（默つて頷く）。

主人　それは無論事實なのだから、それを何もお前が氣に病むには當らない！。俺も此方からの訴訟狀に丁度その通りの事をかいて、お前を元の自由な身體にしてやつて呉れと法廷へ請願したのだ。

ゲルダ　そんな事をおかきになつたの、あなたが……

主人　さうだ、かいた、年をとり過ぎてゐるとはかかなかつたが、年をとり過ぎたものになりかかつてゐるとかいた、勿論お前の亭主としてだよ！。

ゲルダ　（佛然として）。私の亭主としてですつて？。

主人　さうだ！。——二人が結婚した當時俺が年をとり過ぎてゐたといふ事は出來ない、それが云へれば子供の生れた事が不愉快な事件を仄めかす事になる。しかしあの子は二人の間の子なんだらうからな、さうぢやないか？。

ゲルダ　それは貴方がよく御存知です！。——しかし……

主人　俺は何も自分の年齡を羞かしがるにも當るまいぢやないか？。是で俺が夜になつてボストンを踊つたり骨牌をしたりしたがつたら、屹度直ぐに片羽車に載せられたり手

術臺に擔ぎ上げられたりする様になる、それこそ恥辱だ！。

ゲルダ　あなたはそんなにはお見えにならない・・・

主人　お前は、俺が離別の爲に死ぬだらうとでも思つてゐたのか？。

ゲルダ　（何方にもとれる様子をして默つてゐる）。

主人　人によつては、お前が俺を殺したんだ、とも云つてゐる！。俺は殺されたものの様にお前にも見えるかい？。

ゲルダ　（間を惡るがる）。

主人　お前の味方は小新聞で俺を非道く叩きつけた、しかし俺はさういふ新聞を丸で見なかつた、五年經つた今日ではもうああいふ新聞はみんな反古になつてゐる！。俺の爲に何もお前は良心を苦しめる必要はない・・・

ゲルダ　なぜ貴方は私と結婚なすつたんです？。

主人　男がなぜ結婚するかは、お前がよく知つてゐる。それに俺にはお前の愛情を乞食の様にせびりとる必要がなかつた事も、お前は知つてゐる。お前はまだ覺えてゐるだらう、俺達二人はお前を警めたといふ色んな悧巧な忠告者を笑つたものだ。——しかしお前

がどうして俺の様なものを誘き寄せたのか、俺には到頭分らず了ひだつた・・・。式が濟んでから、お前が俺の方を見向きもしないで、丸で他人の結婚式にでも出てゐる様に振舞ふのを見た時、是は屹度俺を殺して見せるといふ賭をして來たものに相違ないと、俺は思つた。俺の下役は、俺が上役だといふので、みんな俺を憎んでゐた、所がさういふのがすぐお前の味方になつて了つた。俺に新しく敵が出來る、するとそれがすぐお前の味方になつた！。その爲俺はお前にかう云はなくてはならなくなつた、汝の敵を憎む勿れといふ事がある、是は可い、しかしお前は俺の敵を愛してはいけないと！。——しかしお前がどういふ仕向けをして呉れる女だといふ事が俺に分つた時、俺は自分の荷物を片づけ出した。しかしその前に俺はお前が嘘をついたのだといふ生きた證人が欲しかつた——それだから俺は子供の出來るのを待つてゐた。

ゲルダ　よくまあ白ばくれていらしつたんですね！。

主人　俺はうち明けなくなつた、しかし決して嘘はつかなかつた！。——お前は段段俺の味方を探偵にして了つた、それどころかお前は俺の實の兄弟を誘つて俺に裏切らせた。それはまだ可い、何よりいけない事は、お前は無分別なお饒舌をして生れた子供が俺の胤

でない様な事にして了つた！。

ゲルダ　それは私後で取消しましたわ！。

主人　一旦翅が生えて飛び出した言葉は、再び攫まへて歸る譯には行かない。しかも一番いけない事は、その嘘の噂が子供の耳に這入つた事だ、子供は自分の母親を……

ゲルダ　そんな、そんな事はありません！。

主人　ところが、さうだつた！。――お前は嘘の土臺の上に高い塔を築き上げたのだ、さうして今その嘘の塔がお前に倒れかからうとしてゐる！。

ゲルダ　それは嘘です！。

主人　ところが嘘でない！。俺はたつた今アンナ・シャロッテに遭つて來た……

ゲルダ　あの子にお遭ひになつた……？。

主人　階段の上で遭つた、するとあの子は俺の事を小父さんだと云つた！。小父さんとはどういふ意味か、お前は知つてゐるか？。家の而して母の、年上の友達だといふ意味だ。俺はちやんと知つてゐる、あの子の行つてゐる學校ででも俺は小父さんといふ事になつてゐるのだ！。子供にとつてこんな非道な事はない！。

ゲルダ　本當にあの子にお遭ひになつたんですか？。

主人　遭つた、しかしそれを何も人に云ふ必要はなかつた。俺だつて默つてゐる事の權利は持つてゐる筈だから！。それにあの子との出遭ひは俺を非道く興奮させた、俺はあの子といふものが嘗て此世に存在した事もない様な風に、俺の記憶の中からあの子を抹殺して了つた。

ゲルダ　あなたの名譽を取返す爲には、私はどうすれば宜しいのでせう？。

主人　お前が？。お前には俺の名譽は取返せない、取返せるのは俺丈だ。

（二人は鋭く且長く眼を見合ふ。）

主人　といふのは、俺の名譽はもう俺が自分で取返してゐる……

（間）

ゲルダ　私に償ひをつける事は出來ないのでせうか？。許して頂く樣に、忘れて頂く樣に、お願ひする事は出來ないのでせうか……

主人　といふのは？。

ゲルダ　償ひをつけて、出直して……

主人　切れた縁を又繋いで、やり直しをして、此家の女主人にならうといふのか?。いや、御免を蒙る!。俺はお前と一緒にならうとは思はない!。

ゲルダ　そりやあんまりです!。

主人　自分の胸に訊いて御覽!。

（間。）

ゲルダ　あのテーブルの下敷は綺麗ですこと、あすこの・・・・

主人　うん、あれは綺麗だ!。

ゲルダ　何所でお買ひになつたの?。

（間。）

ルイゼ　（調饌室の扉口に現はれる、手に勘定書を持つてゐる）。

主人　（振り向く）。勘定書?。

ゲルダ　（立ち上がる、やけに手袋をはめる、そのため扣鈕がとれて飛ぶ）。

主人　（金を取出して勘定する）。十八、七十二!。よろしい!。

ルイゼ　一寸申上げたいのでございますが?。

主人　（立ち上がつて扉口へ行く、其所でルイゼが彼に何事か囁く）。そいつあ・・・・

ルイゼ　（行く）。

主人　可哀相に!。

ゲルダ　と仰有るのは、あなたの所の下女に私が嫉妬をやいてゐるといふ事ですか?。

主人　いいえ、そんな事を考へはしない!。

ゲルダ　でも、あなたは私には年をとり過ぎてゐるが、あの女にはさうぢやない、と仰有つたでせう。その位の皮肉は私にだつて分ります・・・・。あの女は綺麗ですよ、私もさうぢやないとは申しやしません、下女としては・・・・

主人　可哀相に!。

ゲルダ　なぜそんな事を仰有るんです?。

主人　お前が氣の毒だから！。俺の召使ひに嫉妬をやくなんて、もつとも好い氣味だといふ氣もするが。

ゲルダ　私が、嫉妬を・・・・

主人　行儀の好い物靜かな私の親類の娘に對してなぜお前はそんなにぢたばたするのだ？。

ゲルダ　親類丈なもんですか・・・・

主人　大違ひだ、そんな事はもう疾くに諦めて了つてゐる・・・今ぢやもう一人ぽつちに滿足してゐるんだ・・・・

（電話の鈴が鳴る。主人は其所へ行く。）

主人　フィッシェル？。此方ぢやありません！。——ああさうですか、ええ、私です。——駈落したんですつて？。——誰と駈落したんです？。——菓子屋のシュタルクの娘と！。へえ！。あの女は幾つでした？。——十八！。一人つ子だのに！。

ゲルダ　あの人の逃げた事なら、私知つてゐました！。——しかし女と逃げたなんて！。——あなたは好い心持でせうね無論！。

主人　いいや、さうは思はない。世の中にも正義があるといふ事が分つて心持が輕くはなるけれども！。人生の移り變りは早い、俺の坐つてゐた所に今度はお前が坐つてゐる！。

ゲルダ　私の二十九に向うの十八——あの人には私が年寄り、年をとりすぎてゐるのですねえ！。

主人　凡てのものは相對的だ、年だつて同しだ！。——そんな事よりも、お前の子供は何所にゐる？。

ゲルダ　私の子供！。私すつかり忘れてゐた！。子供！。ああ！。どうかして下さい！。あの人が子供を連れてつたんです！。あの人はアンナ・シャロッテを自分の娘の樣に可愛がつてゐたんです・・・・。私を警察へ連れて行つて下さい・・・・。連れて行つて下さい！。

主人　俺が？。それは困る！。

ゲルダ　助けて下さい！。

主人　（右手の扉の所へ行く）。カール・フリードリッヒ！。ちよつと來て辻馬車で

ゲルダを警察へ送つて呉れないか?。——どうだね?。

兄弟 (來る)。いや無論行くよ!。何しろお互人間同士だから!。誓つて!。

主人 早く!。しかしシュタルクにはなんにも云はないが可い。まだ元に戻せるかも知れないから!。あの男も可哀相だな——ゲルダも可哀相だ!。急いでくれ!。

ゲルダ (窓から外を覗く)。降つて來た、傘を貸して下さいな……。十八——たつた十八!。——早く早く。(兄弟と駈け出す。)

主人 (一人で)。老境の靜けさか!。——さうして自分の子は遊び人の手に渡つて、寄席で踊りを踊らされる!。——ルイゼ!。

ルイゼ (來る)。

主人 さあ象棋をしよう!。

ルイゼ 領事樣は……

主人 一寸用があつて出かけて行つた……。まだ降つてゐるかな?。

ルイゼ いいえ、もう止みました!。

主人 それなら外へ出て涼む事にしようか!。(間)。お前は親切で物分りの好い子だ、お前は菓子屋の娘を知つてゐるかい?。

ルイゼ ええ、でもほんの少し!。

主人 美人かな?。

ルイゼ ええ、そりやあ美人です!。

主人 この二階に住んでゐた人達を知つてゐる?。

ルイゼ お目にかかつた事もございません!。

主人 氣兼をしてゐるのだな!。

ルイゼ 私此所のお家へ伺つてから默つてゐる事を覺えました!。

主人 聾の眞似も可いが度を過すと命にかかはる事もあるやうだ。——お茶の支度をして置いて下さい、一寸外へ出て涼んで來るから。——それから一つ、今此家で始まつてゐる事がある、それは御覽の通りだ、しかし私になんにも訊かないでゐて下さい!。

ルイゼ 私が?。決してそんな、私穿鑿好きぢやございません!。

主人 難有う!。

住宅の表側、初めの場に同じ。菓子屋の内から灯が洩れる。二階の部屋には灯がつけてある、窓は明け放たれてゐる、巻帷は捲き上げてある。

菓子屋　（自分の家の扉口にゐる）。

主人　（緑色のベンチの上で）。夕立が來たのは難有い。

菓子屋　大助かりでございます！。是から又蝦夷苺を始めます…

主人　それぢや一二升譲つて下さい、内で作るのは止めたんだから——沸いたり黴が生えたりする計りでね…

菓子屋　ええ、よくある奴ですよ！。何しろ果物を漬ける壺はいたづらな子供と同じ様に眼が離せません…。サルチル酸なぞを入れる者もありますが、ああいふ新流行の誤魔化しは私の所ではやりません…

主人　サルチル酸なら、防腐劑なんだから、可いかも知れない…

菓子屋　でもあの味がつきます…それに誤魔化しものなんですからね…

主人　時に、あなたの所には電話がありますか？。

菓子屋　いいえ、私の所にはありません。

主人　さうですか！。

菓子屋　どうしてそんな事をお訊きになるのでございます？。

主人　なにふいとさう思つたから…電話はどうかすると中中重寶なものだ…注文だの…大事な知らせだの…

菓子屋　さうかも知れませんね！。しかしどうかすると、どんな知らせも受けない方が可いものですよ。

主人　まつたくね！。まつたく！。——私は電話のベルを聞く度に、きつと動悸が高くなる——どんな事を聞かされるか、丸で見當がつかないんだから…ところが私は靜な心持でゐたいのだから——何よりも靜な心持でゐたいのだから！。

菓子屋　私もさうでございます！。

主人　（時計を見る）。もうそろそろ街燈の點く時分ですね！。

菓子屋　私どもの所へは來るのを忘れたものと見えます、並樹路はもう煌煌としてゐるんですから・・・・

主人　なに、今に來るでせう！。家の前に灯がつくのは嬉しいものですね・・・・

（電話の鈴が部屋の中で鳴る。ルイゼが現はれて電話機の所へ行く。主人は立ち上がつて、胸に手を置いて、聽耳を立てる、しかし話は聞えない。）

（間。）

ルイゼ　（花壇を通つて出て來る）。

主人　（不安さうに）。何か變つた事が？。

ルイゼ　いいえ別に！。

主人　私の兄弟ですか？。

ルイゼ　いいえ、ゲルダさんでございました！。

主人　なんだと云ふんです？。

ルイゼ　あなたに電話に出て頂きたいんですつて！。

主人　御免を蒙る！。私の首斬役を私が慰めてやる譯がない！。昔はそれをして來た、しかし今はもう厭になつた！。——あの二階を御覽！。灯が點つぱなしにしてある——人のゐない部屋に灯がついてゐるのは、暗闇よりも氣味が悪い・・・・なんだか幽靈でも出て來さうな氣がする！。——（半音で。）それで菓子屋のアグネスは——菓子屋はもう何か聞いたでせうか？。

ルイゼ　なんとも分りません、あの人は自分の苦勞を口に出さない人ですから、それにこの靜な家では外に誰も知つてゐる人はなささうでございます。

主人　あの男に云つた方が可いでせうか？。

ルイゼ　いいえ、決して仰有つては・・・・

主人　しかしあの子があの男に苦勞させるのは、是が初めてではないのでせう？。

ルイゼ　あの人は娘さんの事を些とも話しませんから・・・・

主人　ああ堪らない！。早く片づいて呉れれば可い！。

（電話の鈴が又部屋の中で鳴る）

主人　又鈴が鳴つてゐる！。打遣つてお置きなさい！。なんにも聽きたくない！。――自分の子が！。あんな手合の手に渡つて！。遊び人とあばずれの手に！。――ああ堪らない！。ゲルダも可哀相に！。

ルイゼ　判然した事が分る事が宜しいと思ひます――私行つて參ります――成行によつてはどうかなさりませんでは！。

主人　私は身動きも出來ない……。受ける事は出來る、しかし刎ね返す事は、出來ない！。

ルイゼ　でも危險を避けて計りゐると、今度は向うから迫つてまゐります、抵抗しずにゐると、打ち据ゑられます！。

主人　這入り込ませさへしなければ、近づきやうはない！。

ルイゼ　近づきやうがない？。

主人　中に立ち入つて縺れさせさへしなければ、何でも早く片がつくものです。あんな色んな情火の煽られてゐる所へ、私に乘り出して行けといふのは、それは到底無理な要

求です！。私にはあの人達の情火を鎭めたりあの人達の道を變へたりする力はない。

ルイゼ　でもお小さい方が？。

主人　それも私は一切の權利を拋棄して了つたんです……それに――白狀すると――格別私は氣にもならない――もう今となつては、何しろあれが來て私の思ひ出の中の繪を拭き消して了つたんだから――私が今迄大事にしてゐた凡ての美しいものは、あれから消されて了つた、後にはもうなんにも殘つてゐない。

ルイゼ　それであなたは自由におなりになりました！。

主人　まあ私の家の中を御覽なさい、なんだか空つぽになつて了つた。丁度引越の跡の様に……。あの二階は燒跡の様に見える！。

ルイゼ　あれは誰でせう？。

アグネス　（興奮して、おどおどして、來る、何氣ない顏をつくつて、菓子屋の掛けてゐる、中庭口をめがけて行く）。

ルイゼ　（主人に）。アグネスです！。どうしたんでせう？。

主人　アグネスだ！。——片がつき出したんだな！。

菓子屋　（極めて落ついて）。やあ！。何所へ行つてゐたんだい？。

アグネス　散歩して來たの！。

菓子屋　母さんが幾度もお前の事を訊いてゐたよ。

アグネス　さう？。だから今歸つて來たのよ！。

菓子屋　下りて行つて手傳つてお遣り、小さな竈を燃してゐるんだから！。ね！。

アグネス　母さんは憤つてるでせうか？。

菓子屋　母さんはお前には憤れないんだよ！。

アグネス　あらそんなことは、でも母さんはなんにも仰有らない。

菓子屋　小言を云はれない方が可いぢやないか！。

アグネス　（這入る）。

主人　（ルイゼに）。菓子屋は知つてゐるのかしら、知らないのかしら？。

ルイゼ　知らずにゐれば結構なんでございますけれども・・・

主人　しかしどうしたと云ふんでせうね？。——仲違ひをしたのかな？。——菓子屋に。）ねえ、シュタルクさん！。

菓子屋　なんでございます？。

主人　いや別に・・・。あなたは誰か此所から出て行く所を見かけはしませんでしたか、少し前に？。

菓子屋　氷屋と郵便屋を見かけた、様でございますよ。

主人　あさうですか！。——（ルイゼに。）何かの間違ひかも知れない——聞き違ひなんだらう——どうも私には分らない・・・。ことによるとあの娘があの男を弄戯つたのかも知れない！。ゲルダは電話で何て云ひました？。

ルイゼ　あなたに電話に出て頂きたいつて仰有いました！。

主人　どんな聲をしてゐました？。興奮してゐましたか？。

ルイゼ　ええ！。

主人　少し厚かまし過ぎますね、こんな事件で私に頼みがあるなんて・・・

ルイゼ　でもお子さんが！。

主人　階段であの子に遭つて了つたんですからね！。お前は私を覺えてゐるかと訊いたら、あの子は私を小父さんだと云つた。さうして、父さんは二階にゐると云つて聞かせた・・・。その父さんといふのは勿論あの子の繼父の事です、さうして繼父が一切の權利を持つてゐるのです——みんなして私の記憶を根こそげ絶やして、私を散散にして了つたのです・・・

ルイゼ　馬車が角で止まりました！。

（菓子屋這入る）

主人　みんな歸つて來て呉れなければ可いのに、さうでないと私は厄介でたまらない！。——自分の娘が他人を父さん父さんと云ひ囃すのを聞いてゐたり——それから、「なぜあなたは私と結婚なすつたんです？」——「それはお前がよく知つてゐる。それぢや何故お前は俺を亭主にしようとしたんだ？」——「それはあなたがよく御存知です！」。かうして世界の果迄も續く古いお噺を又事新らしく始めたり。

ルイゼ　領事さんが入らつしやいました！。

主人　どんな顔をしてゐます？。

ルイゼ　別にせかせかしておいでの様でもございません。

主人　自分が云ふ事のお浚ひをしてゐるのでせうよ？。滿足さうな顔をしてゐますか？。

ルイゼ　何方かと云へば、考へ込んでいらつしやいます・・・

主人　ははあ・・・。昔からさうだつた。あの女の傍へ行くと、あの男は極つて私の敵になつて了つた。・・・あの女は誰にでも魔法をかける事が出來た、私丈にはそれが出來なかつたけれども！。私にとつてあの女は粗野な無愛想な醜い魯かな女だつた、外の人達にとつてあの女は磨きの掛つた愛想の好い美しい悧巧な女だつた！。私の不羈獨立が私の周圍に惹き起した憎みが、私に不正な事をする者に對する無限の同情となつて、あの女の周圍に集つた。あの女を通してその連中は私を支配し私に影響し私を傷け最後に私を殺さうとしたのです！。

ルイゼ　私内へ這入つて電話の番をして參ります。——この夕立模樣も屹度通り過ぎて了ひませう！。

主人　人間は不羈獨立な性格を耐へる事が出來ない！。自分達の云ひなりにしようとする！。私の下役は小使に至る迄悉く私を云ひなりにしようとした。私が云ひなりにならなかつたら、彼等は私に暴君といふ名前をつけた！。家の下女達は、私を云ひなりにして私に煮直しものを喰はせようとした。私が云ひなりにならなかつたら、彼等は妻を私に嗾けた！。最後に妻は、私を子供の云ひなりにさせようとした。かうして暴君――私の事を暴君だと云ふのだ――暴君に對する謀叛が起つた、しかしその時私は勝手に家を飛び出して了つた！。――早く内へお這入り、ルイゼ、ことによると此所で地雷火が破裂するかも知れない！。

兄弟　（左手から來る）。

主人　結論は！。――細かな道行は聞く必要がない！。

兄弟　掛けさせて貰はうか？。少し疲れた…

主人　だがこのベンチは雨で濡れてゐるよ…

兄弟　お前が掛けてゐたんだから、俺の身體に障る樣な事もあるまい！。

主人　ぢや掛けたら可いだらう！。――子供は何所にゐる？。

兄弟　初めから話させて呉れないか？。

主人　話すが可い！。

兄弟　（徐に）。それで俺はゲルダと一緒にステーションへ行つた――札賣場にあの男とアグネスとが見えた…

主人　ぢやアグネスは行つてゐたんだね？。

兄弟　行つてゐた、それからお前の子も！。――ゲルダは外に立つてゐた、俺はどんどん傍へ行つた。丁度その時あの男がアグネスに切符を渡した、ところがそれが三等の切符だつたのを見て、アグネスはそれを男の顔に叩きつけた、而して馬車のある方へ駈け出して行つた。

主人　へえ！。

兄弟　俺があの男に談判を始めてゐる内に、ゲルダは先き廻りをして子供を捕まへてその儘人込みの中に消えて了つた…

主人　あの男は何と云つた？。

兄弟　そりやお前、黨派が違へば、自然…

主人　それが聞きたいんだ！。俺達が考へてゐた樣には、屹度あの男も惡い男ぢやない。善い點も持つてゐるのだらう…

兄弟　その通りだ！。

主人　それは俺にも考へられない事ではない！。しかし俺が俺の敵に對する讃辭を喜んで聞くものだとは、まさかお前も思つてゐやしまい！。

兄弟　いや、讃辭なんかぢやない、しかし情狀酌量にはなる…

主人　昔俺が事件は事實どんな風になつてゐるかといふ事をお前に說明しようとした時、お前はそれを聞いて呉れたか？。俺が嘘をついてでもゐる樣に、お前は不愉快さうな顏をして默つてゐた。お前はいつでも不正の味方だつた、さうして嘘丈を信じてゐた、しかもそれは、お前が――ゲルダに惚れてゐたからなんだ。もつとも外にもう一つ動機はあつた…

兄弟　もう云つて呉れるな！。――お前はお前の立場丈から見てゐるのだ！。

主人　俺の事件をどうして俺が敵の立場から眺められる？。自分で自分に手を當てる事は出來ないぢやないか？。

兄弟　俺はお前の敵ぢやない！。

主人　しかし、俺に不正な事をしたものの味方になつてゐたんだからな！。――子供は何所にゐる？。

兄弟　俺は知らないのだ！。

主人　ステーションでの結末はどうなつた？。

兄弟　あの男が一人で南の方へ立つて行つた！。

主人　さうして後の二人は？。

兄弟　消えて了つたのだ！。

主人　ぢや又俺の所へ來るかも知れない！。

（間。）

主人　二人も一緒に立つたのぢやないな？。

兄弟　立たない、あの男一人で立つた！。

主人　それぢや少くともあの男丈は片づいた譯だ！。今度は第二號だ！。――母と子

供とが殘つてゐる！。

兄弟　どうしてあの二階の部屋には灯がついてゐるのだらう？。

主人　消して行くのを忘れたから！。

兄弟　俺が上がつて來よう…

主人　止せ止せ！。——歸つて來て吳れなければ可いがなあ！。小學校の日課の樣に、何もかももう一度やり直すなんて！。

兄弟　しかし初めの方は片がついたぢやないか…

主人　ところが一番いやなやつがまだ殘つてゐる…。どうだね、お前は歸つて來ると思ふか？。

兄弟　ゲルダは來ないだらう、ルイゼの前でお前に謝らなくつちやならないから。

主人　さうだ俺は忘れてゐた！。あの女は難有い事に嫉妬をやいて吳れた！。やつぱり世の中には正義といふものがある樣だ！。

兄弟　おまけにゲルダは、アグネスが自分より若いといふ事を聞いたんだから！。

主人　可哀相に！。しかしかういふ場合に、世の中には正義がある、覿面應報の正義があるなどと、人に云つてはいけない事になつてゐる…人が正義を愛するなんていふ事は嘘なんだから！。だから人間の穢い事を有の儘の言葉で云ふ事は許されない！。——だから應報（ネメシス）は——この世界の人間のものぢやない！。…（間。）あ、鈴が鳴る！。まるで鈴蛇の樣な音がする、あの電話は！。

ルイゼ　（部屋の中の電話機の所に現はれる）。

（間。）

主人　（ルイゼに）。蛇が喰ひつきはしなかつたですか？。

ルイゼ　（窓で。此所から申上げまして宜しうございますか？。

主人　（窓の傍に寄る）。言つて下さい！。

ルイゼ　ゲルダさんはお母さんの田舍へ行らつしやるんださうでございます、お孃さんと御一緒に其所でお暮しになるんですつて。

主人　（兄弟に）。親子で田舍のちやんとした家へ行くんだ！。やつと是で片がついた！。ああ！。

ルイゼ　それから私へお頼みで、二階へ上がつて灯を消して呉れつて仰有いました！。

主人　すぐ消して來て下さい、それから卷帷（ブーロー）を下ろしてね、なんにも見なくて濟む樣に！。

ルイゼ　（行く）。

菓子屋　（又出て來る。空を見る）。夕立は通つて了つた樣でございますね。

主人　本當に霽れ上がつた樣です、是から月が見られます！。

兄弟　結構な雨でした！。

菓子屋　まつたくせいせいしました！。

主人　あ、やつとの事で點燈夫がやつて來た！。

（點燈夫が來る、街燈に灯（ひ）を點（とも）す。）

主人　初めての灯（ひ）だ！。秋らしい氣持がする！。是が我我老人の季節だ！。暮れがたが迫つて來る、しかし理性が來て燈火（あかり）で道を照らす、我我は少しも迷はない。

ルイゼ　（二階の部屋で窓から姿が見える。と思ふと二階が暗くなる）。

主人　窓を締めて卷帷（ブーロー）を下ろして下さい、さうすれば思ひ出は安らかに眠れる！。老いの靜けさだ！。——秋になつたらこの靜な家（うち）を越して行く事にしよう。

岩波文庫
214

昭和二年十一月三十日印刷
昭和二年十二月五日發行

稻妻 ★
定價二十錢

譯者 小宮豐隆

發行者 東京市神田區南神保町十六番地
岩波茂雄

印刷者 市京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目
菊地眞次郎

株式會社秀英舍印刷

發行所 東京市神田區南神保町十六番地
岩波書店
電話九段二一〇九番
振替東京二六二四〇番

讀書子に寄す

岩波文庫發刊に際して

岩波茂雄

眞理は萬人によつて求められることを自ら欲し、藝術は萬人によつて愛されることを自ら望む。嘗ては民を愚昧ならしめるために學藝が最も狹き堂宇に閉鎖されたことがあつた。今や知識と美とを特權階級の獨占より奪ひ返すことはつねに進取的なる民衆の切實なる要求である。岩波文庫はこの要求に應じそれに勵まされて生れた。それは生命ある不朽の書を少數者の書齋と研究室とより解放して街頭に隈なく立たしめ民衆に伍せしめるであらう。近時大量生產豫約出版の流行を見る。其廣告宣傳の狂態は姑く措くも、後代に貽すと誇稱する全集が其編輯に萬全の用意をなしたるか。千古の典籍の飜譯企圖に敬虔の態度を缺かざりしか。更に分賣を許さず讀者を繫縛して數十册を强ふるが如き、果して其揚言する學藝解放の良途なりや。吾人は天下の名士の聲に和して之を推擧するに躊躇するものである。この秋にあたつて岩波書店は自己の責務の愈重大なるを思ひ、從來の方針の徹底を期するため既に十數年以前より志して來た計畫を愼重審議この際斷然實行することにした。吾人は範をかのレクラム文庫にとり、古今東西に亙つて文藝哲學社會科學自然科學等種類の如何を問はず、苟も萬人の必讀すべき眞に古典的價値ある書を極めて簡易なる形式に於て逐次刊行し、あらゆる人間に須要なる生活向上の資料、生活批判の原理を提供せんと欲する。この文庫は豫約出版の方法を排したるが故に、讀者は自己の欲する書物を各個に自由に選擇することが出來る。携帶に便にして價格の低きを最主とするが故に、外觀を顧みざるも內容に至つては嚴選最も力を盡し從來の岩波出版物の特色を益發揮せしめようとする。この計畫たるや世間の一時の投機的なるものと異り、永遠の事業として吾人は微力を傾倒しあらゆる犧牲を忍んで今後永久に繼續發展せしめ、もつて文庫の使命を遺憾なく果さしめることを期する。藝術を愛し知識を求むる士の自ら進んでこの擧に參加し、希望と忠言とを寄せられることは吾人の熱望するところである。その性質上經濟的には最も困難多き此事業に敢て當らんとする吾人の志を諒としてその達成のため世の讀書子とのうるはしき共同を期待する。

昭和二年七月

岩波文庫

□此文庫は、普及を第一義として刊行する廉價版です。

□**内容の嚴選**　古今東西のあらゆる古典及び、價値高き良書を網羅し、校訂、飜譯に於ても最善を期します。

□**最低の廉價**　出來る丈安く手に入れられる樣に、小さい形の中に、澤山の内容を盛る形式を採りました。

□**購求の自由**　しかも讀者が全く自由に、欲しい本を隨時求められる自由選擇の方法を執りました。

□方法は、範を廣く内外に覓めたる結果、最合理的普及版たる獨のレクラムに則りました。

□約百頁を單位として星一つを以てそれを現はし、★一つ毎に二十錢の定價です。

□★一つを1に數へて此の文庫の番號を進めてゆきます。

□番號はたゞ發行順に從つて之を追ふものであります。

□★★或は★★★★★は、夫々二百頁或は五百頁の本一册なる事を示し、百頁づゝの分册ではありません。

□裝幀は平福百穗畫伯を煩はしました

□送料(及定價)は左表の通りです。

	定價	送料
★	二十錢	二錢
★★	四十錢	四錢
★★★	六十錢	四錢
★★★★	八十錢	六錢
★★★★★	一円	六錢

□御注文は前金で御願ひ致します。

1—4 新訓 萬葉集 上卷 佐佐木信綱編 ★★★★
5—7 新訓 萬葉集 下卷 佐佐木信綱編 ★★★
8—9 こゝろ 夏目漱石著 ★★
10 プラトング ソクラテスの辯明 リトン 久保勉譯 阿部次郎譯 ★
11—12 カント 實踐理性批判 波多野精一 宮本和吉譯 ★★
13 古事記 幸田成友校訂 ★
14—15 藤村詩抄 島崎藤村自選 ★★
16—21 スミス 國富論 上卷 氣賀勘重譯 ★★★ 中卷 ★★ 下卷 續刊 (未刊)
32 にごりえ たけくらべ 樋口一葉著 ★
33 國性爺合戰 鑓の權三重帷子 近松門左衛門作 和田萬吉校訂 ★
34—38 戰爭と平和 第一卷 トルストイ作 米川正夫譯 ★★★ ★★
39—41 戰爭と平和 第二卷 上 トルストイ作 米川正夫譯 ★★★
42—44 戰爭と平和 第二卷 下 トルストイ作 米川正夫譯 ★★★
45—55 戰爭と平和 第三卷 第四卷 續刊 (未刊)
56—58 芭蕉七部集 伊藤松宇校訂 ★★★
59 五重塔 幸田露伴著 ★
60—61 病牀六尺 正岡子規著 ★★
62 父 ストリントベルク作 小宮豐隆譯 ★
63—64 出家とその弟子 倉田百三著 ★★

65 櫻の園 チエーホフ作 米川正夫譯 ★
63—67 幸福者 武者小路實篤著 ★★
68 號外 他六篇 國木田獨歩著 ★
69—70 科學の價値 ポアンカレ著 田邊元譯 ★★
71—73 認識の對象 リツケルト著 山内得立譯 ★★★
74 おら春が我 春一作 集 荻原井泉水校訂 ★
75—76 北村透谷集 島崎藤村編 ★★
77—78 賢者ナータン レツシング作 大庭米治郎譯 ★★
79 春の目ざめ ヴエデキント作 野上豐一郎譯 ★
80 令嬢ユリエ ストリントベルク作 茅野蕭々譯 ★

81 會我會稽山 心中天の網島 近松門左衛門作 和田萬吉校訂 ★
82 闇の力 トルストイ作 米川正夫譯 ★
83—84 仰臥漫錄 正岡子規著 ★★
85—87 科學と方法 ポアンカレ著 吉田洋一譯 ★★★
88 伯父ワーニャ チエーホフ作 米川正夫譯 ★
89 生ける屍 トルストイ作 米川正夫譯 ★
90 賃勞働と資本 マルクス著 河上肇譯 ★
91—92 チャールズ・ダーウヰン ダーウヰン著 小泉丹譯 ★★
93 俗樂旋律考 上原六四郎著 ★
94 好色一代男 西鶴作 和田萬吉校訂 ★

95 風流一口剛 佛幸田露伴著 ★
96—97 カントプロレゴーメナ 桑木嚴翼譯 天野貞祐譯 ★★
98—99 上田敏詩抄 茅野蕭々編 ★★
100 奥の細道 その他 芭蕉作 伊藤松宇校訂 ★
101 ちたかたの記 他三篇 水沫集より 森鷗外著 ★
102—103 綱島梁川集 安倍能成編 ★★
104—105 小公子 バアネット著 若松賤子譯 ★★
106—109 希臘羅馬神話 バルフインチ著 野上彌生子譯 ★★★★
110 好色五人女 西鶴作 和田萬吉校訂 ★
111—113 ゲエテとの對話抄 エツケルマン著 亀尾英四郎譯 ★★★

114 千曲川のスケッチ 島崎藤村著 ★
115 ブロタゴラス 菊池寛一郎譯 ★
116 愛と死との戯れ ロマン・ロラン作 片山敏彦譯 ★
117 布施太子の入山 倉田百三著 ★
118 埋木 水沫集より 森鷗外譯 ★
119—120 オネーギン プーシユキン作 米川正夫譯 ★★
121 好色一代女 西鶴作 和田萬吉校訂 ★
122—125 ギルヘルム・マイスター（上） ゲーテ作 林久男譯 ★★★★
123—128 ギルヘルム・マイスター（下） 續刊 （未刊）
129—130 民約論 ルソー著 平林初之輔譯 ★★

131 マルクス 資本論（一） 河上肇 宮川實譯 ★

132 マルクス 資本論（二） 河上肇 宮川實譯 ★

133—168 マルクス資本論 續刊（未刊）

169—170 古今和歌集 尾上八郎校訂 ★★

171 花傳書 世阿彌作 野上豐一郎校訂 ★

172—174 スピノザ 哲學體系 小尾範治譯 ★★★

175—176 蕪村七部集 伊藤松宇校訂 ★★

177—180 法の精神 上卷 モンテスキュー著 宮澤俊義譯 ★★★★

181—184 法の精神 中卷（近刊）

185—188 カラマーゾフの兄弟（一） ドストエフスキー作 米川正夫譯 ★★★★

189—191 カラマーゾフの兄弟（二） ドストエフスキー作 米川正夫譯 ★★★

192—199 カラマーゾフの兄弟（三）（四）（近刊）

200 日本書紀 上卷 黑板勝美編 ★

201—209 日本書紀 中卷 下卷（近刊）

210—211 若いヱルテルの惱み ゲヨエテ作 茅野蕭々譯 ★★

212 勞賃價格及び利潤 マルクス著 河上肇譯 ★

213 日本永代藏 西鶴作 和田萬吉校訂 ★

214 稻妻 ストリントベルク作 小宮豐隆譯 ★

215 青銅の基督 長與善郎著 ★

216—217 水の上 モウパッサン作 吉江喬松譯 ★★

218—219 經濟要錄 佐藤信淵著 瀧本誠一校訂 ★★

220—221 和解・或る男其姉の死 志賀直哉著 ★★

222 幽靈 ストリントベルク作 小宮豐隆譯 ★

223—224 墨汁一滴 正岡子規著 ★★

225—226 恐ろしき媒 ホセ・エチエガライ作 永田寬定譯 ★★

227 作り上げた利害 ベナベンテ作 永田寬定譯 ★

228 子守唄 シエルラ作 永田寬定譯 ★

229 人間萬歲 武者小路實篤著 ★

230—231 ラスキン 藝術經濟論 西本正美譯 ★★

232 世間胸算用 西鶴作 和田萬吉校訂 ★

233 自然認識の限界 デュボア・レーモン著 宇宙の七つの謎 坂口徳男譯 ★

234 陸奥直次郎 長與善郎著 ★

235—237 福澤選集 福澤諭吉著 ★★★

238 二人女房 尾崎紅葉著 ★

續刊書目

カント 純粹理性批判 上卷 天野貞祐譯

シュライエルマッヘル 宗教論 石原謙譯

キンデルバント 哲學とは何か 河東涓譯

イマヌエル・カント 學者と文人 ポアンカレ著 平林初之輔譯

形而上學序論 ベルグソン著 鍋田義富譯

ニイチエ この人を見よ　安倍能成譯
パスカル著 パンセー　落合太郎譯
モンテーニュ著 エッセー　落合太郎譯
ホイエルバッハ著 將來の哲學の根本命題　植村晋六譯
ホイエルバッハ著 哲學改革への提言　植村晋六譯
ラッサール著 勞働者綱領　小泉信三譯
リカルド著 經濟原論　小泉信三譯
ロードベルクス著 地代論　山口正吾譯
マルクス エンゲルス ドイツチエ・イデオロギー　三木清譯
ルソーエミール　平林初之輔譯

ベーベル 婦人論　牧山正彦譯
世界の生成　アレニウス著 寺田寅彦譯
種の起原　ダーウキン著 小泉丹譯
雜種動植物の遺傳　メンデル著 小泉丹譯
生命の不可思議　ヘッケル著 後藤格次譯
クロポトキン 相互扶助論　近三四二郎譯
神皇正統記　星野日子四郎校訂
源氏物語　紫式部作 島津久基校訂
平家物語
參考 伊勢物語　屋代弘賢校訂

榮華物語　川上多助校訂
和漢朗詠集　山田孝雄編
金槐集　齋藤茂吉校訂
忠兵衛梅川 冥途の飛脚　近松門左衛門作 和田萬吉校訂
博多小女郎波枕　近松門左衛門作
西鶴織留　西鶴作 和田萬吉校訂
開卷驚奇 俠客傳　馬琴作 和田萬吉校訂
椿說弓張月　馬琴作
近世說美少年錄　馬琴作
小說浮牡丹　山東京傳作 和田萬吉校訂

本朝醉菩提　山東京傳作
浮世風呂　式亭三馬作 和田萬吉校訂
浮世床　式亭三馬作 和田萬吉校訂
謠曲集　野上豐一郎編
舞の本　野上豐一郎編
申樂談義　世阿彌原著 野上豐一郎編
竹の里歌　正岡子規著
子規俳句集　正岡子規著
道草　夏目漱石著
十三夜　その他 樋口一葉著

そ　武者小路實篤著
の　妹

志賀直哉短篇小說集　志賀直哉著

中野逍遙集　笹川臨風編

左千夫歌集　齋藤茂吉　土屋文明編

啄木歌抄　若山牧水編

陶淵明詩集（桃花源記　附歸去來辭）　幸田露伴校閲　漆山又四郎譯註

佛蘭西文學史敍說　ブリュンチエエル著　關根秀雄譯

ヘルマンとドロテア　ゲエテ作　佐藤通次譯

マノンレスコー　プレボー作　河盛好藏譯

檢察官　ゴーゴリ作　米川正夫譯

三人姉妹　チエーホフ作　米川正夫譯

白鳥のうた　チエーホフ作　米川正夫譯

路上　チエーホフ作　米川正夫譯

現代の英雄　レルモントフ作　中村白葉譯

死刑囚の最後の日　ユーゴー作　豐島與志雄譯

痴人の告白　ストリントベルク作　和辻・林共譯

エピクロスの園　アナトール・フランス作　林達夫譯

ドン・キホーテ　セルヴアンテス作　永田寛定譯

沙翁物語　ラム　野上彌生子譯

樂園喪失　ミルトン　藤井武譯

岩波

Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

inches 1 2 3 4 5 6 7 8

cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black